



日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry : 略して JIFH) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年にひとりの日本人がインドシナ難民救援に参加したことを契機として誕生しました。以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、18 ヶ国 55 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

2011 年 世界食料デー

今年も全国 19 ヲ所で「世界食料デー大会」が開催されます。今年は、『ハンガーゼロの世界を目指して…迫り来る食料危機』をテーマに各地の実行委員会が講演、現地報告、コンサート、国際児童画展などを企画しています。また、大会以外にも支援者グループや企業や家庭単位でもこの機会を通じて、世界の貧困と飢餓の問題を考えて「わたしから始める」に取り組まれる方々が多くおられます。

東日本大震災という大きな試練の中で、世界中から温かい支援をいただいている日本の私たちだからこそ、いまでも世界で貧困と飢餓に苦しむ 9 億人以上の人々の苦しみや生きる闘いをより身近な問題として知ることが出来ます。ともにハンガー・ゼロの実現のために力を合わせましょう。大会の参加やスケジュールについては、事務局の東京事務所までご連絡ください。

世界食料デーについては次号で詳しくお知らせいたします。

クレジットカードご利用一部可能に

当機構はパソコンや携帯電話 (PHS を除く) でインターネットを閲覧できる支援者の方々を対象に、クレジットカード及びコンビニエンスストア (店頭) 利用による送金 (募金) ができるように準備中です。なお、スマートフォンは利用できません。

夏のワークキャンプ中止

今年 8 月に行う予定であった南米ボリビアでのワークキャンプは、参加申し込みが定員にとどかなかったため、中止となりました。

ハンガー・ゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

本deリンク 利用者の声

飢餓対策ニュースで「本deリンク」の事を知り、何回か本を送らせて頂きました。自分が使わなくなった物がこんな形で生きてくると本当に嬉しく思います。

私が一般の古本屋さんで換金すると、自分のところだけで終わってしまいますが、飢餓対策機構へ寄付する事によって名前の通り、本で他の人と繋がって行くんだなぁ、と思います。本を着払いで送って後から送料の半額を振り込むというシステムも利用しやすく良いと思います。こういう素晴らしいアイディア

で世の中の誰かが使わなくなった物を役立てるシステムがたくさん出来ると良いと思います。感謝いたします。(埼玉県・菊地ふみ)
※菊地さんはこれまでに計 7 回も本deリンクを活用してご支援してくださいました。(愛知事務所)

【2011 年 1 月～6 月報告】

本：2,104 冊、CD：437 枚
DVD：21 枚、ビデオ：4 本
ゲームソフト：4 本
換金額：124,462 円
一般募金として用いさせていただきました。有り難うございました。

- ☐ ハンガー・ゼロ・サポーターとして協力します。
毎月 () 口、協力します。(1 口 1,000 円)
- ☐ JIFH 会員になり毎月定期的に財的協力をします。
毎月 () 口、協力します。(1 口 500 円)
- ☐ 「世界里親会」に協力します。
説明書、里親会入会申込書を送ってください。
- ☐ 海外派遣スタッフを支援します。
毎月 () 円 () スタッフ指定
- ☐ 海外派遣スタッフを支える会の会員になり、
協力します。毎月 () 口 (1 口 1,000 円)
- ☐ 郵便自動引落の申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名： _____ 男・女

フリガナ
住所： _____

_____ (電話) _____

▼申込日： _____ 年 _____ 月 _____ 日▼

FAX・072-920-2155

ハンガーゼロ・サポーターのお申し込み拡大中です。運動への参加を感謝いたします。



日本国際飢餓対策機構

2011 No.253

8

飢餓対策 News



ルワンダで出会った子どもたち。新しい国をになっていく彼らには全人的教育のアプローチが欠かせない

「幾千の丘」と呼ばれる中央アフリカの国、ルワンダ。その名のようになだらかな丘陵地帯が国土全体に広がり、爽やかで穏やかな風が訪れる者を歓迎してくれます。17 年前にこの国が血塗られたとは想像すらできません。

1994 年 4 月に勃発したジェノサイド (集団殺戮) は、約 100 日間で 80 万人とも 100 万人とも言われる人々が虐殺されました。その国で、被害者・加害者の赦しと和解、恒久的な平和構築の働きを進める現地 NGO 団体「REACH」が 15 年前から活動を展開しています。

当機構も 2008 年より東部カヨンザ郡において、虐殺によって心と体に深く傷を受けた人々の癒しと赦し、和解に向けた「癒しと和解のセミナー」や、加害者・被害者による社会活動 (スポーツや演劇、収入活動など)、罪を告白した加害者が、被害者のための家造りに取り組む「償いのプロジェクト」などを通して、人々がかつての悲劇から立ち直り、相互の信頼を再建していくことを支援しています。

そして、今秋からは貧困地区に生きる子どもたちに教育の機会を提供しているピース インターナショナル スクール (Peace International School) を通して世界里親会を開始します。この学校はあるクリスチャン夫婦が私財

を投じて 2001 年につくられました。以来、近隣国のコンゴやタンザニア、ブルンジの難民の子どもたち、また虐殺孤児やエイズ孤児など教育機会の全くない取り残された子どもたちを受け入れ、自立能力の育成 (農業、洋裁、家畜、IT 技術訓練) を通じて、国の中で平和を構築 (ピースメーカー) する全人的人財育成を行なっています。

平和構築には、過去の大虐殺によって壊れた関係の修復、心身共に傷ついた人々の癒しなど和解と共生への取り組みと、同じ過ちを二度と繰り返さない予防的取り組みが求められています。そのため、将来の国を担う子どもたちに対して「善隣共生」(善き隣

ピースメーカーを育む

人となって共に生きる) というイエス・キリストの愛の原則に立った、全人的教育のアプローチが続けられています。ルワンダにおける世界里親会の働きが、未だ多くの紛争を抱えるアフリカにおける平和構築の一つのモデルケースとなることを願っています。

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし…二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり…」(エペソ 2 章 14, 15 節)

国内啓発総主事 田村治郎

★ご協力を感謝します★皆様に飢餓対策ニュースをお届けするために、毎月、ひばり障害者作業所 (八尾市)、生活愛 (大阪市など)、そして関西一円のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。ありがとうございます！

■発行 者	岩橋竜介	大 阪	〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1 TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155
■発行 所	一般財団法人 日本国際飢餓対策機構	東 京	〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル 517 号室 TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782
		愛 知	〒466-0064 名古屋市中昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114
		広 島	〒731-0103 広島市安佐南区緑井 2-21-23 201 号 TEL (082)831-1214 FAX (082)877-3961
■郵便振替	00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構 ※支援金は随時受け付けております。	沖 縄	〒901-0156 那覇市田原 3-8-1 ユリ香ハウス 201 号 TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540
		東 北	〒980-0012 仙台市青葉区錦町 1-13-6 エマオ 2 階 E TEL (022)217-4611 FAX (022)217-6651

世界の食料価格の高騰は、食費の割合が高い開発途上国の貧困を増大させています。栄養不足の影響が一番受けるのは、成長期にある子どもたちです。特にサハラ砂漠以南のアフリカの国々では、人口の1/3から半数が飢餓状態にあります。

いまだからこそ立ち止まって考えてみよう 飢餓が生み出される原因



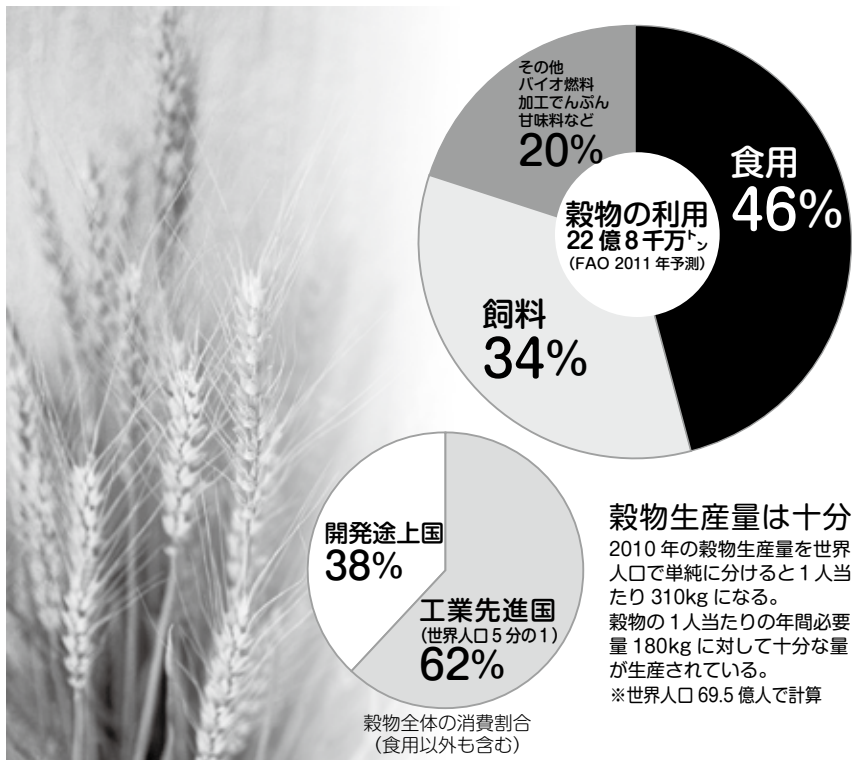
FAO(国連食糧農業機関)は、世界の食料価格が今年4月には2003年と比較して2.3倍になり、昨年に比べて36%も高くなっていると発表しました。

価格の上昇理由のひとつとして、穀物の需要が生産量を上まわり、在庫が少なくなっていることが挙げられています。2011年の世界の穀物生産高予想は22億4千万トン。同年の世界の穀物需要予測は22億8千万トンですから、数字の上では確かに4,000万トン不足することになります。

それでは穀物生産量が足りないから、世界の7人に1人が飢餓状態になるのでしょうか。世界で生産されている22.4億トンの穀物を世界人口69億5,000万人で単純に分けると、1人当たりおよそ310kgになります。1人当たり1年間の必要量は180kgといわれていますから、穀物は世界中の人が食べるのに十分な量が生産されているのです。

人の食用は半分以下

ではなぜ足りないのでしょうか。生産された穀物は世界でどのように利用されているのかは、FAOの統計を見るとわかります。22.8億の穀物利用のうち主食などで人が直接食べるのは半分以下の10.5億トン、家畜の飼料や燃



料など他の用途に利用されているのが54%の12.3億トンです。

飼料用とバイオ燃料用(とうもろこし)の穀物の需要は、2012年にはさらに1,700万トン増えるとFAOは予想しています。これは主に牛肉や車の燃料として使われます。

このように、食用とその他を合わせた世界の穀物の62%、約14億トンを、世界の5分の1以下の人口の工業先進国の私たちが使っているのです。

もっとおいしいお肉をもっとたくさん食べたい、もっと便利な生活をしたい、私たちの「もっと、もっと」が、世界の食料の価格を

押し上げ、アフリカをはじめ飢餓に苦しむ人たちを生み出す原因のひとつになっているといっても過言ではありません。

豊かな生活に向かって走り続けてきた私たちは、この度の大震災や原発事故を機に、立ち止まって生き方を見直そうとしています。そしてもう一歩、自分のことだけではなく世界で1日1回の食事もままならない方々にも目を向けましょう。ハンガーゼロのサポーターになってご協力ください！

「わたしから始める、世界が変わる」

(資料 Crop Prospects and Food Situation No.2 2011 FAO)

●ハンガー・ゼロ・サポーターのお申し込みは、専用ウェブサイト <http://www.jifh.org/hungerzero/> からできます

活動地の

ボリビア多民族国

駐在 小西小百合

思い出

1997年の前半、カリブ海の島・ドミニカ共和国の首都サントドミンゴの事務所勤務をしながら田舎の赴任地へ行く準備をしていた頃、事務所にはフレサさん(スペイン語でいちごの意)という既婚女性がまかないの仕事をして下さっていました。彼女は小柄で細身、ドミニカの大多数の人々がそうであるように茶褐色の肌に笑顔の時の白い歯が印象的な、きゃしゃでかわいらしい感じの女性でした。

彼女は毎日二度、朝一番と昼食後に事務所の私たち全員にドミニカン・コー

ヒーを入れてくれました。コーヒー産出国のドミニカでは、老若男女を問わずコーヒーを飲みます。小さなデミタスカップで飲む、濃くて、砂糖がたっぷり入った甘いコーヒー。日本ではこんなに甘いコーヒーはとても飲めませんが、日差しがきつく常夏のこの

国ではこの甘いコーヒーが、暑さで疲れた心と体を癒すのにぴったり。人々は子どものうちから、いえ赤ちゃんの頃からこのコーヒーを飲んで育つのです。

フレサ(いちご)さんの ドミニカン・コーヒー



4年間教育コーディネーターとして奉仕したドミニカの活動地に2006年に再び訪れた時に再会の喜びを分かち合う

●ボリビアでは、世界里親会を通じて子どもたちの応援していきます。支援についてのお問い合わせは大阪事務所まで



●小西小百合●

1996年から3年間ドミニカ共和国、4年間ペルー共和国での働きを経て、現在ボリビア多民族国のコチャバンバ、チャヤで人づくりコーディネーターとして活動中

杯?)」と尋ね、私たち一人ひとりに愛情たっぷり
のコーヒーをサービスしてくれたからです。もちろん味も抜群！

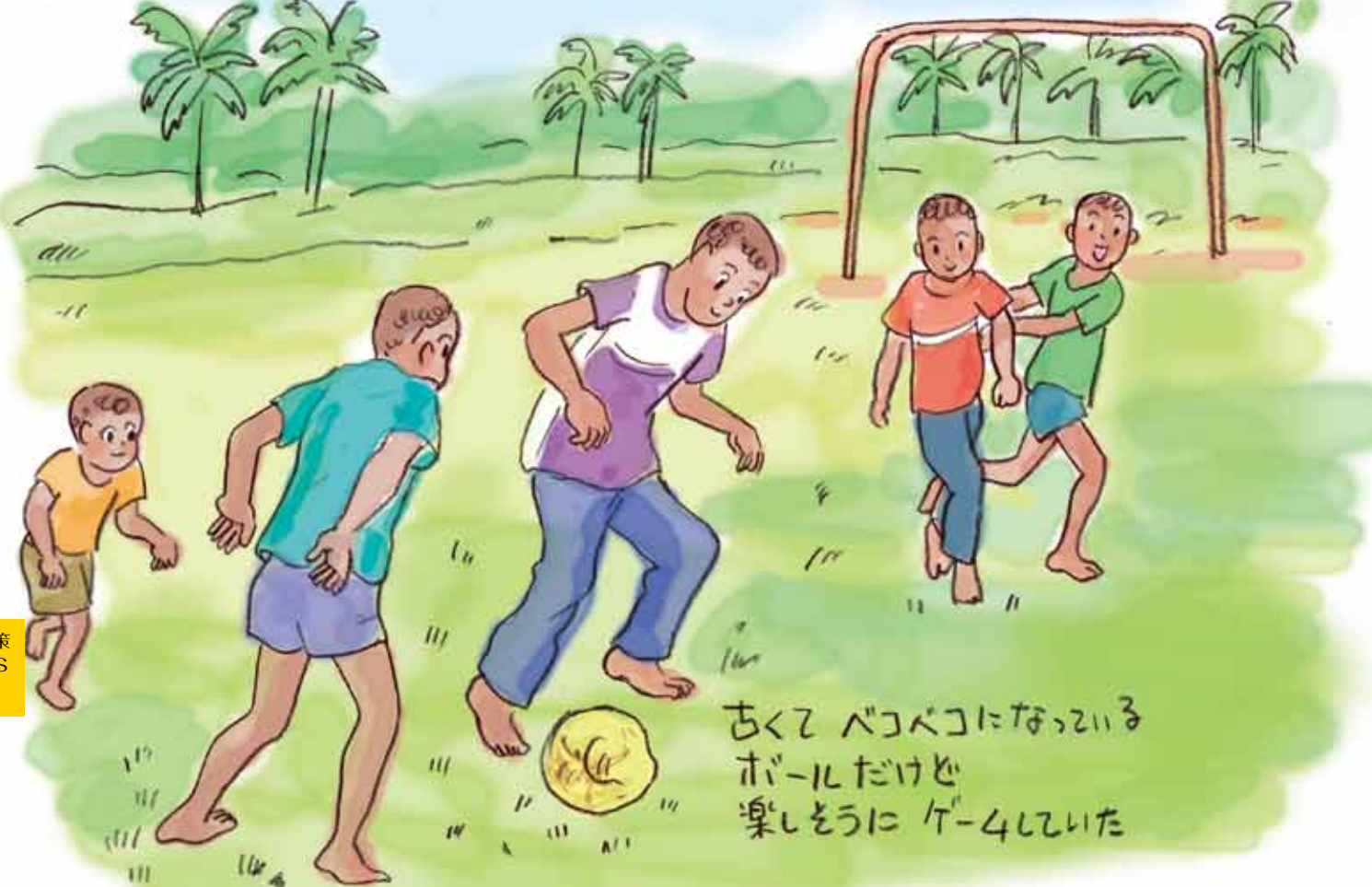
また彼女はとても料理上手で私たちに格安な値段で昼食を作ってくださいました。神様のことが大好きで、よく祈り、どんなことがあっても笑顔で愚痴をこぼさず、感謝が絶えない人でした。私のことを「サーユー！」と、親しみを込めて呼んでくれたあの声のトーンを今でもはっきりと覚えています。週明けにはいつもお互い抱き合って「元気だったー？」と挨拶を交わしたものです。私たちの小さなかわいいお母さん・フレサさん。部屋で一人コーヒーを入れて飲むとき、ふと「また彼女が入れてくれたコーヒーが飲みたいなあー」と懐かしく思い出すので

スプーンに何

「ルワンダの原っぱで 出会った子どもたち」

子どもニュースのまんがを描いているみなみなみさんが今年1月16日から2月8日まで、アフリカ研修ツアーに
行って見た事の続きです。

空き地で元気にサッカーやボール投げをする子どもたち。サッカーはルワンダでも大人気みたいです。はだしなのに、みごとにボールを蹴っていました。



サッカーの上手な大人とプレイできて盛り上がる子どもたち。ルワンダには、日本みたいな少年サッカー教室があつたりコーチがいたりするのかな？



ペンを片手にメモをしていたら私の所におんなの子がひとり来て、小さな声で「ペンがほしい」といいました。他でも何回か聞かれたこと。ペンやノートなどの文房具をたくさん持っている子は少ないのかもしれませんが、たったペン1本あれば文字も絵もかける。可能性が広がるのにぜんねんです。



みなさんは大きくなったら何になりたいですか。ある調査では、日本の男子はサッカーや野球の選手、女子は食べもの屋さんや保育園・幼稚園・学校の先生だそうです。日本では、その夢に向かってサッカー教室などで練習したり、お菓子づくりの学校に入って勉強するなど、方法はいろいろあります。

けれども、ルワンダのような貧困の中にある国では、子どもたちがサッカーなどスポーツ選手をめざしても、道具を手に入れることさえむずかしい上、はだしてプレイするので、破傷風という感染症にかかる恐れもあります。日本のように予防接種が普及していないからです。

また勉強をしたくても、ルワンダで中学校に行ける子どもは100人中12人くらいです。中学校に行くには1年間におよそ1万4千円は必要ですが、これは学校の先生の給料の約3ヶ月分にあたります。したがって貧しい農家が子どもを中学校に行かせるのはむずかしいのです。

世界中の子どもたちが、将来に希望をもって歩めるように、そして夢を実現することができるように、私たちにできることがあります。いっしょに支援の輪を広げましょう。

置き薬プロジェクトを開始

当機構は7月から避難所などから仮設住宅に入居された被災者の生活支援のための「置き薬プロジェクト」を宮城県仙台市と名取市でスタートしました。この取り組みでは、仮設住宅の入居期限である2年間にわたり、家庭用常備薬を無償で提供、被災者の生活再建の負担軽減をはかりながら、健康面や生活面の相談にも継続的に関わります。

このプロジェクトは、当機構と数)と大規模余震発生時などの緊急食料としてパン・アキモトから調達したパンの缶詰セット（一箱5缶入り）なども合わせて提供しました。

「薬が2年間も無料で使えるのはありがたい」「こんなに沢山の物資をいただくのは初めてです。ありがとうございます。」「このパンの缶詰知っています。ほんと嬉しいです」7月4日に仙台市若林区の仮設住宅訪問で、薬箱や生活用品やパンの缶詰を受け取られた皆さんから喜びの声をたくさんいただくことができました。7月に入り各地の避難所から仮設住宅に入居する被災者が増えてきています。「仮設に入ればこれまでのように支援が受けられなくなり、不安です」という被災者の声を聞く中で、この取り組みが少しでも負担軽減になることを願います。

また置き薬の設置の際には、サマリタンスパース（米国支援組織）から提供された「生活応援キット」（鍋、フライパンなどの台所用品や殺虫剤、シーツなど多

仙台に事務所を置く中京薬品の社員さんとボランティア、JIFHスタッフの3人一組であらかじめ許可をいただいている仮設住宅を1軒1軒訪問し、一人一人とことばを交わしながら了解を得て、氏名や家族、被災状況を聞き取ります。家・車が全て流さ

れ、家族や友人を失い、着のみ着のまま避難した所からようやく入居された方々の口は重いと思いきや、こちらが聞く前に地震・津波の恐怖の有様を話し出されます。

避難所生活の特異な状況から仮設に移り、狭くても家族単位的生活になった時点から、3月11日のあの時をあらためて思い起こし、その恐怖を誰かに語らずにはおれ

仮設住宅での出会いの中で 再び立ち上がる日を願って

ないのでしょうか。その複雑な心の内を私たちはどう受け止めてあげればいいのか。ただ傍に寄り添って聴く事も大切な支援であり、人と人との絆によって、被災された



置き薬や生活支援キットを喜んでくださった相沢さんご夫妻（若林区）



津波が来た時に自転車で逃げていたんですが、近所の人に「母さん乗れって」言われて自転車を捨てて車に飛び乗ったんです。とにかく無我夢中で、孫のおしめとジャンパー2枚だけ握りしめてお金も何も持たずに逃げました。家は全壊で2階が少しだけ残りましたが、まだ片付け終わってないんです。本当にみんなに世話になり助かっています。ありがとうございます。（柴崎さん、56歳。若林区日辺の仮設住宅で大学生の渡辺ボランティアとともに）

置き薬プロジェクトは当面600世帯をめどに順次進めていく予定です。

方々がやがて立ち上がるきっかけとなれば幸いです。

初めは無料提供された物品に戸惑いつつ、直ぐに喜びの顔に変わって何度も何度も感謝とお礼を述べられる方々を見ると、炎天下の中、仮設の棟を汗まみれになって配布するボランティアさんや私たちも嬉しくなりました。物心両面の真の復興を目ざしてこれからも共に歩ませて頂きたいと願います。

（大阪事務所 松島育子）

地元からボランティアに参加

温かい笑顔嬉しかった

JIFH物資倉庫ボランティア 佐藤秀子

自宅は海のすぐそばの荒浜（仙台市若林区）で、地震の時は、祖父母と双子の妹の4人がいて子どもだけが学校にいました。揺れがあまりにも大きかったので、近所の人にも声をかけて10分以内に車で去年の訓練で覚えた避難場所（七郷小学校）に逃げました。もう一つの海に近い荒浜小学校に逃げた人の中には、助からなかった人もいましたし、車は全部流されました。

避難してから3日目位に避難場所から車で出ましたが、地獄のような光景でした。多くの遺体も見え、車は電柱の上に引っかかっているし、そんな状況の中で壊れ

た車から平気でガソリンを抜いていく人たちがいて本当に信じられませんでした。後で遺体安置所で親戚の確認にいったら、遺体の中に顔見知りの人が百人ほどおられました。棺にお花も写真もなく言葉になりませんでした。

避難所の最初の一週間は一人畳一畳もない位の狭さと寒さで大変でした。そのうち体育館から教室に移動してとにかく25人位でみんなであるもの分け合ってたのぎました。その後別の体育館に移って3ヶ月以上過ごしました。

JIFHの物資倉庫のことは避難所の体育館で聞きました。野菜や夏服、お米、日用品いただけるも

人が繋がる力強さに感動

東北大学法学部4年 江藤弘章

私は東北大学地域復興プロジェクト『HARU』に所属しています。今回の東日本大震災で経験したこと、現在JIFHのボランティア活動に参加をしている感想をお話したいと思います。

地震当日は、就職面接を終えて自転車を取り出そうと思ったその時、大きな揺れが襲いました。どの人もその場で立ってられず、しゃがみ込んでいました。今まで聞いたことのない地響きやビルがきしむ音も聞こえました。帰り道では、壁が剥がれ落ちているビル、地面のズレが各所に見られました。自宅は無事でしたが、ライフラインが全て遮断したため、一旦近くの避難所に行きました。しかし、寒さに耐えきれず自宅に戻

りました。翌日は友人と共に大学に行き、大学内で乾パンと水の配給を受け、夜にはカレーも配られました。その日のうちに電気・水道が復旧しましたが、改めて電気と水の大切さを思い知らされ、再び使えることを心から感謝しました。また、震災直後から復旧工事に尽力されていた方々にも本当に感謝です。

少しずつ市内の環境も戻りつつあり、自分の回りを見る余裕も出てきたので、「困っている人たちに何かできないか」と考え、ボランティア活動に参加することにしました。初めは仙台市ボランティアセンターに登録し、現在はJIFHの活動に参加しています。活動に参加して、同じボラン

佐藤さん⑥と木村ボランティア（JIFH物資倉庫で）



のは何でも本当にありがたいです。だからここまで来れないお年寄りや近くや遠くの知り合い（岩手）に届けています。着の身着のまままで逃げてきたので、タオル1枚すらなかったので毎日来たこともあります。いつでも温かい笑顔で迎えていただき涙が出るくらい嬉しかったです。

だからせめて私も何かお返しできればと思って、倉庫でボランティアをさせていただくことにしました。私もみんなに「おいでよ!」と声かけています。



写真は江藤さん提供

ティアや彼らを支えるスタッフとの繋がり、またその力強さに最も感動しました。一人一人ができることには限界がありますが、その小さな力が集まることでより大きな力になります。また、それを積み重ねていくことで、被災者の生活の平穏、被災地の復興の早期実現に近づきます。どんな小さな作業や自分ではこれは何のために？と思ってしまう作業でも、復興に向けた大切な行動の一つです。その意味を考えて、これからも被災者支援活動を続けていきたいと思っています。